

テナー・サクソこそが

初恋であり永遠の恋人だ

INTERVIEW

# MAX IONATA

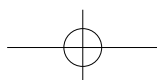
マックス・イオナータ

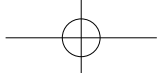
イタリアのジャズ・シーンで今最も注目を集めるテナー・サクソ奏者、マックス・イオナータが来日! 正統派ハードバップからリリカルなバラードはもちろん、エフェクトを効かせたファンキーなプレイだってお手のもの。サクソの伊達男は意外にも凝り性で浮気者? 愛用する気鋭のイタリアン・サクソ・リパモンティと、秘蔵のセルマー・マークVIに対する愛を語ってくれた。

## MAX IONATA [マックス・イオナータ]

イタリア・アブルツォ州出身、1972年生まれ。ベスカーラの音楽院にて学ぶ。ロザリオ・ジュリアーニ、ステイーヴ・レイシーらに師事。2000年、マッシュモウルバーニ賞を受賞。その野太いサウンドと溢れ出る力強いフレーズには評価が高く、イタリアのジャズ・シーンを牽引するサクソ奏者として注目されている。日本でも本格派ジャズ・ファンのみならずクラブ・ジャズ層からも厚い支持を受ける。最新作は、『インスピレーション・ライブ』(2014年)

インタビュー: 石川周之介  
取材協力: イタリア文化会館  
撮影: 小原啓樹





サクソと恋に落ちたきっかけは  
デクスター・ゴードンだった

●あなたはいつごろからサクソを始めたのですか？

◎楽器を始めたのは5歳か6歳のころさ。子供だったから、耳で聴いた音をひとつずつ探り当てるようにして練習していたよ。

●あなたは当初からテナー・サクソを演奏していたんですか？

◎最初にプレイし始めたのはソプラノだった。でも吹きたかったのはテナーかアルトさ。先生についたときに“アルト・サクソがやりたい”って言ったら、“OK、じゃ1本譲ってあげよう”って言われたんだけど、彼が出してきたのはソプラノ（笑）。でも結果的にはとても楽しかったよ。

●いつからテナーに替えたのですか？

◎7歳ぐらいかな。村のマーチング・バンドに入るときに運良くテナー・サクソに替えることができたんだ。でも当時の私にはテナーは大き過ぎて、普通に吹いていたら地面に着いてしまっただけ（笑）。マーチング・バンドは歩きながらプレイしなきゃならないから、随分苦労したよ。でもそれ以来、私はずっとテナー一筋だ。

●最近ではソプラノも吹かれていますよね。

◎ああ、今は時々ソプラノをプレイすることもあるけど、私にとってはテナーこそが初恋であり、永遠の恋人だよ。

●あなたが最初に憧れた、アイドルというべきサクソ奏者はだれですか？

◎私がサクソと恋に落ちたきっかけは、デクスター・ゴードン (ts) だったんだ。多分15歳ぐらいだったんじゃないかな。レコードで初めて彼の音を聴いたときに、身体にすごい衝撃が走った。それで彼の作品を次から次へと聴いていったんだ。

●あなたのプレイは歌うようにスムーズでまたとてもダイナミックですが、何かプレイで意識していることはありますか？

◎自分ではどうやって演奏するかを考えてやっ

てるわけじゃないんだ。気持ちの赴くままにプレイしている感じなんだよ。こうやれと演奏法を叩き込まれたこともないしね。ただ、子供のころは唇を巻いて音を出していたよ。フーフーフー、って。

●ダブル・リップですね。スタン・ゲッツ (ts) のような感じですか？

◎そうそう、スタン・ゲッツさ。そうやってただひたすら楽器と向き合っただけで、試行錯誤しながら演奏法を身に付けてきたんだ。

●それでは最初に本格的なレッスンを受けたのはだれですか？

◎最初に本格的に習った先生はロザリオ・ジュリアーニ (as) だったね。彼は一日5~6時間は練習をさせたよ。たった1フレーズを丸1時間やらせるんだから、頭がおかしくなる。でもまあ、彼は最高の先生だったね、それは間違いない。

●ロザリオに習うときもあなたはテナーを吹いていたんですか？

◎ああ、レッスンでも彼はアルトを吹いて、私はテナーを吹いていたよ。彼は私をとて可愛がってくれて、熱心に教えてくれた。彼とはよく会ってたし、一緒にプレイする機会ももらったよ。毎回、やればやるほどたくさんのお話を教えてもらってたね。

●マウスピースとリードに関して、あなたのセッティングを教えてください。

◎今使っているのはラファエル・ナバーロのマエストラというブラックのラバーのモデルだ。でも、それは少し慣らす時間が必要だから、今夜使うのは昔作ってもらったハンドメイドのマウスピースだ。私はリードに満足できなかったから、毎晩違うマウスピースを合わせているんだよ。

●今夜使うハンドメイドのマウスピースはどのものなんですか？

◎今夜使うのはバリのマウスピースで、フィリッポ・ブッチというローマ出身のリフェイスに作り直してもらったものだ。確か私の注文が彼の初仕事だったね。腕はイタリアでもピカイチだから今は売れっ子さ。でも私のバリはほかの人たちにとってはひどいマウスピースだと思うよ。私にはすべてにおいて完璧な

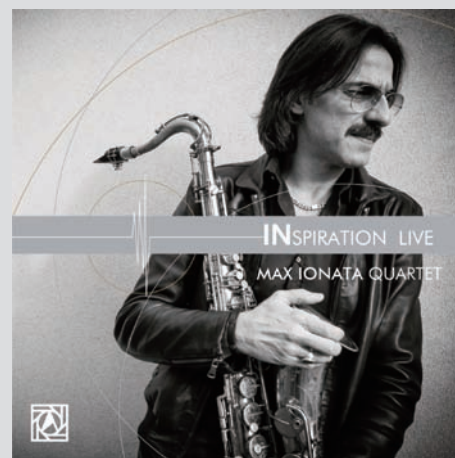
んだけど。

●完璧とおっしゃるバリの気に入っているポイントはどこですか？

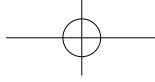
◎僕がこのバリを使っている理由はね、ブッチはムダに大きなチェンバーにしないんだ。それなりの大きさはあるけど小さくもない。ビッグ・サウンドなんだけど吹きやすい大きさで、そのバランスがちょうどいいんだよ。そう、アメリカのジャーナリストがジョン・コルトレーン (ts) のインタビューを集めた『Coltrane Secondo Coltrane』って本があるんだけど、その中で彼が自分のマウスピースについて語ってる言葉があるんだ。“このマウスピースは決して完璧とは言えない。これまでに何千というマウスピースを試してきたけれど、どれひとつとしてこれで間違いない、と思えるようなものには出会えなかった。でも、このマウスピースは僕にとってはベストなんだ”ってね。単純に“ワンドフル”なんて言わずにね。それで、このバリはまさしく、現時点で僕にとってベストなマウスピースなんだよ。

●サイズはどれくらいですか？

◎マウスピースのサイズは7☆で、リードはリゴッティの3 1/2 だ。そして今はウッドストーンのリガチャーを使ってプレイしているよ。今回東京に来てソリッド・シルバーのものを一つ購入したんだ。これはプレイしていて本当に気持ちいい。そんなわけで今私はとてもハッピーだよ（笑）。



『Inspiration Live』Max Ionata Quartet  
マックス・イオナータのサイン入りCDを読者の  
中から1名にプレゼント！ 詳細はP191にて



リパモンティは完璧な  
サウンド・バランスを持った楽器

●あなたは今回お持ちのセルマー・マークVI以外に普段イタリア製のサクسسもお使いだと聞きましたが、そのサクسسについて少し詳しく教えていただけますか？

◎ああ、リパモンティ・サクسسのことだね。製品名はリパモンティ・シルバー・カスタムVIだったかな。これはセルマー・マークVIからインスピレーションを得てつけられた名前なんだよ。あれは言うなれば、オールドスタイルの楽器とニュースタイルの楽器のちょうど中間に位置するような、完璧なサウンド・バランスを持ったサクسسなんだ。つまりブライトにもダークにも演奏できるってことだね。

●リパモンティ、ボガーニ、ランポーネ&カッツァーニなどのイタリア製のサクسسについてはどんな印象ですか？

◎どれも素晴らしいよ。私はたくさん楽器を持っていて、その中には例えばボガーニもランポーネ&カッツァーニもある。しかし人によって感じ方はさまざまだろうね。どんな楽器でも自分には合わないと思うこともある。リパモンティは最初に吹いた瞬間に素晴らしいと思ったね。しかも私のリパモンティは一点もので、私はハイF#のキをを外してそのトーン・ホールを塞いでもらっている。それからネックの入り口に手を加えてさらにプレイしやすくしてある。そういう意味でも私の仕様にしてもらっているから馴染むんだろう。

●リパモンティとマークVIを持ち替える際に違和感や難しさは感じませんか？

◎さほど難しさを感じることはないよ。でもどちらかと言えば、自分の新しい楽器の方が吹きやすいのは確かだ。過去にコーンのようなアメリカン・ビンテージ・サクسسを使ったときはかなり違和感があったけど、1か月もあれば問題なくこなせるようになったね。ほかにセルマーのバランスド・アクションの23000番を持っているんだけど、あれは楽器の傑作だね。まあ慣れに関しては早いか遅いかという程度の差だよ。ただ、このマークVIをプレイしたときは“完璧だ”と思ったね。

●お持ちのマークVIは何番台ですか？

◎これは73000番台だ。実に素晴らしいよね。私のこの楽器に対する心酔ぶりと言ったら、あまりに愛でるもんだからうちの女房がヘソを曲げるくらいだね(笑)。

●ハハハ。では、あなたがマークVIにそこまで惚れ込む理由というのは何ですか？

◎そうだな、まず私のマークVIはメカニカルな意味でパーフェクトなんだ。カゼルタの都市にいる友人が調整してくれたんだけど、まるであつらえた手袋のように楽器が私の手にぴったり馴染むんだよね。

●なるほど。あなたにとってはマークVIこそがあなたの声という感じですか？

◎ああ、でもリパモンティも私の声そのものだ。みんなによく言われるんだよ。“何を替えてもあなたはいつも同じ音だね!”って。私自身はそれ

ぞれに違いを感じてるんだけど、周りには同じに聴こえるらしい。

●最新アルバムの中で、ワウ・ペダルを使ってとてもファンキーなパフォーマンスをされていましたが、エフェクターを使っている演奏は頻りにされるのですか？

◎実はまだ使い始めたばかりなんだ。いろんなエフェクターを次から次に試してみた挙句に、ようやく自分のメインになるものを見つけた感じさ。ボスのDD-7デジタル・ディレイ。それから同じボスのPS-8ハーモナイザーと、クライ・ベイビーのワウワウ・ペダル。あとは、もちろんマイク用のプリアンプだね。面白い試みだとは思ってるけど、これは単なるジョークだよ。決してああいものを今後やっていきたいと思ってるわけじゃない。ただ今は楽しいんだ。イタリア人シンガーのジョジョ・テレスコ(vo)っていう、ファンクが大好きなクレイジー・ガイがいてね。彼の歌に合わせて私がワウ・サウンドでプレイすると、彼は大喜びするんだよ。でもあれはもう、通常のサクسسとは別物だ。ジャズをプレイするときのサクسسはやっぱりクリーン・サウンドじゃないとね。それは鉄則だ。

●今後日本での公演の予定、あるいは日本でのCD発売の予定はありますか？

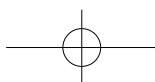
◎4月に発売されたCD『INSPIRATION LIVE』が最新のもので、その先は今のところはノーだ。でも、何とか近いうちにまた来日公演を実現させられたらと切に願っている。私は他人に対するリスペクトと笑顔に溢れた日本人の人が大好きなんだよ。

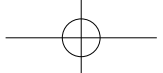


Live Report

Two for Duke (2014.6.9mon)

マックス・イオナータ (ts) とダド・モローニ (p) の二人で活動する“Two for Duke”は、その名の通りデューク・エリントンの曲のみを演奏するコンセプト・ユニットだ。マックスは終始優しい音色でデュークのメロディを大切に近づいていく、ダドはピアノに加えてウッド・ベースにボイス・パーカッションと八面六臂の活躍で曲に彩りを添える。陽気なイタリア人らしく時折見せるユーモアも観客の心をつかんだようで、アンコールのメドレーでは観客の興奮もピークに達し、拍手喝采。この日、イタリア文化会館アネッリホールは立ち見が出るほどの大盛況ぶり、集まった聴衆はみなイタリアン・ジャズを満喫していた。





通常はリング状に型抜きされるベル支柱は珍しい一枚板だ。ブランド名の“L.A.RIPAMONTI”と掘られているのが見える



**L.A.RIPAMONTI Custom VI  
Silver Plated Satin**

L.A.リバモンティの名は創設者のルイージ・アンドレア・リバモンティの名前からつけられている。ルイージは30年来の管楽器の経験からクラリネットに特化した製造を開始した。現在はミラノ郊外にあるパテルノ・ドゥニャーノに工房を構え、クラリネットのみならず、サクソ、フルート、トランペット、ダブルリード楽器に至るまでを製造している



マックスの所有するセルマー・マークVIは初期の番手であるため、サムレストの上に“MARK VI”の刻印がみられる



**American Selmer  
Mark VI(73xxx)**

マックスはこのほかにも多数の楽器を所有しており、コーンやセルマー・バランズド・アクションといった楽器を所有していることから、ビンテージ・サクソの音色に対する彼の強いこだわりが伺い知れる。このセルマー・マークVIはその音色とメカニカルな精度の両方が完璧に揃ったマックスの愛器である



マックスが特に気に入っているというサテンシルバーの管体に、型番と思われるV-JAZZ CUSTOM-VIの刻印とプライト・シルバーの彫刻部分が見られる



マックスの愛用するパリのマウスピース。イタリア人のフィリップ・ブッチによってリフェイスされているが、このほかにもオープニングの違うものもあるそうだ



特徴的なアメセル彫刻と艶色のラッカーが美しいベル部、ビンテージスタイルの細いリング状のベル支柱が後ろに見える

